

ヘロー天気

HERO TENNKI

ワールド・カスタマイズ・
クリエーター 3

目次

本編
7

番外編 闇神隊衛士達の日々折々
257

ラサナーシャ

III・C・C

フォンクランクに六人しか居ない
最上級娼婦・唱姫の水技の民。
実はノスセンテス国の特殊工作
員としても活動中。

田神悠介

たがみゆうすけ

III・C・C

本編の主人公。『災厄の邪神』として召喚された。現在はフォンクランク国の『閻神隊』隊長。ゲームのシステムが元となった能力『カスタマイズ・クリエイト』を操る。

ヴォーメスト

III・C・C

ブルガーデン国の精鋭部隊『火の団』元団長。
イザップナー最高指導官の下で暗躍していたが、主の失脚後に姿をくらます。

ヴォレット・ヴォイラス

III・C・C

炎神の末裔といわれるサンクアディエットの王族。少々過激な行動を取るわがまま
我侬姫。

スン

III・C・C

悠介が異世界に来て最初に出会った少女。
無技の民なので神技は使えないが、悠介の役に立つべく弓の扱いを練習中。

シルザック

フシケ

ヴォーマル

ヒヴォディル

III・C・C

フォンクランクの宮殿衛士隊『炎神隊』に所属する、ヴォレットの婚約者候補の一人にして悠介の良き友人。
「お調子者だが、やる時はやる男」を自負している。

ラーザシア

III・C・C

悠介をノスセンテスに引き込むために抜擢された籠絡工作員。
ラサナーシャの妹を演じながら悠介に近づく。

閻神隊の隊員達

III・C・C

悠介を支える部下。

エイシャ

シャード

イヨカ

「では、補償についてはそのように」

フォンクランク国ヴォレット姫とガゼッタ国王シンハの非公式極秘会談から暫くたったある日。ブルガーデンの女王リシャレウスと、フォンクランクの王エスヴォブスによる公式会談が、デイアノース砦にて行われていた。

会談ではまずギアホーク砦事件の犠牲者遺族への補償について話し合われ、イザップナー元最高指導官の私財を処分してブルガーデン側から全遺族に賠償金が支払われる事となった。

ちなみにこの会談の前に、ブルガーデン側がイザップナーの私財を確認したところ、何者かによって半分程持ち出されていた事が明らかになった。恐らくは、内乱騒ぎのあった日から行方不明となっている『火の団』を中心とした精鋭団員達の仕業であろうと見られていた。私財の一部と共に消えた団員達、すなわちイザップナー派残党の動きは今後も気に掛かるところであるが、幸いにも、残されていた宝石や貴金属類でも何とか賠償金の額は満たせそうであった。

ギアホーク砦の件は一旦決着とし、両国にとって当面の脅威となりうるガゼッタ国についての話題に移る。最近フオンクランク領内で起きている無技の村襲撃事件について、エスヴォブス王はガゼッタの関与があるか否かとリシャレウスに問い掛け、反応を窺う。

「私は、無いと見ています」

「それは、貴女が彼の王の人となりを知った上での判断、と考えてよろしいかな？」

「そう捉えて頂いて結構ですわ」

「ふむ……」

明らかにしてはいないが、闇神隊・田神悠介達の動きやシンハが街に来ていた事などを、エスヴォブス王は把握している。

悠介が本物の『邪神』であるらしい事も、ゼシャールドが神器の製作依頼をした辺りで知った。これは王の側近達も知らない。ちなみに、情報源は自称森の民だったりする。

「少し、踏み込んだ話をしてよろしいかな」

そう言って人払いをしたエスヴォブス王は、ガゼッタの王とリシャレウス女王との個人的な繋がりについて訊ねた。

「貴女はガゼッタ、そしてシンハ王とどう向き合うつもりでいるのか、真意をお聞かせ願いたい」

「シンハの事、ですか……」

多少逡巡しながらも、リシャレウスはシンハに対する自身の気持ちを語り始める。

「シンハは……いえ、ガゼッタの王は、古の亡霊に取り憑かれているのです」

無技の民である白族と神技人とは表裏一体で繁栄と衰退を繰り返す事。それが、カルツイオの営みであり、正しい歴史の流れだと伝える白族の教えに、シンハは縛られているのだと、リシャレウスは語る。

彼女は亡き父王が掲げていた共存共栄の理想実現をもつて、無技の民を、シンハをこの呪縛から解放したいと願っている事を明かした。

「これはまた……ガゼッタと白族について随分お詳しいようだ」

シンハ王が抱える信条や、白族の言い伝えなど、ガゼッタの内情にかなり突っ込んだ内容に、少々面食らった様子のエスヴォブス王。

これまで無技人の王国に関しては、無技の戦士が存在する事から、実在はしているようだが実態は全く不明、という噂の域を超えないものであった。

それが明らかになったのは先日、シンハ王が無技の軍団を率いて戦場に現れた時だ。これによって初めて白族帝国の末裔という存在が世間に示され、知れ渡る事になったのだ。

「私は幼少の頃、短い期間ですが白族の里に住んでいた時期がありましたから」

実はブルガーデンの王族であるトゥール一族は、二千年前に白族帝国が滅亡する以前から白族と

共に暮らし、共栄を望んでいた神技人（当時は色付きと呼ばれていた）達の一勢力の末裔でもある。彼等は追放された白族と一緒に帝国南西の山岳地帯へ逃れたり、あるいはそれとは別行動でトレントリエッタの森を抜け、湖を渡って現在のノスセンテス勢力下から脱出して何とか生き延び、その思想を後世へと伝えて来たのである。

リシャレウスが掲げる共存共栄の理想も、古の時代よりトゥール一族に受け継がれて来た、ある邪神が提唱した理念でもあったという。

「古の、邪神……」

「そうです。これは、四大神信仰の否定にも繋がる話ですが——」

そう前置きして、ブルガーデン女王から語られるガゼッタと邪神、そして四大神に纏わる秘密の一端。リシャレウスは幼少時代、父王や先代ガゼッタ王と共に過ごした白族の里で、四大神信仰の発祥に関する秘密を知った。

神技人国家としての体裁の為に四大神の概念こそ使っているが、リシャレウス自身、本当はそんなモノはまやかしだという認識である。

「……それは」

「四大神信仰は、かつてカルツイオに降臨した邪神『ヴィ・ザード』の没後、時の権力者達の手によって捏造された信仰なのです」



ディアノース砦で、リシャレウス女王とエスヴォブス王がこの世界の常識を引っくり返し兼ねないような話をしている頃。サンクアディエットの中民区にある、悠介の部下ソルザックの店で、この世界の工業面に多大な影響を与えるであろう一つの発明品が生まれていた。

「まだ二段階の変速しか実現出来ませんでした……」

「最初はこんな感じで十分じゃないかな、徐々に出力とか規模を大きくしていこう」

以前から取り組んでいた試作ギアボックスの完成。悠介の『カスタマイズ・クリエート』能力により、歯車や軸などの磨耗を抑え、潤滑油も改良した静音仕様。

それを、カスタマイズのコピーで丸々複製する。片方はソルザックに残してさらなる研究を続けさせ、もう片方は悠介が持つて帰って乗り物に組み込むなど実用化の研究を進める。そうして問題点を洗い出し、改善していくのだ。

「それじゃ、また今月末にでも」

「ええ、乗り物に使った研究結果も心待ちにしていますよ」

宮殿の自室に帰ってきた悠介は、何か適当なモノはないかと部屋の中を物色する。試作ギアボックスは、およそ四十センチ角の箱型から軸が一本突き出ている形だ。モーターを中心に、何重にも歯車を噛み合わせて回転力を強めており、回転速度はイマイチだったが、その分パワーは増しているようだった。

「ん……とりあえず、これにでも取り付けてみるか」

手頃な『乗り物』を見つけた悠介は、試作ギアボックスを組み込むためにカスタマイズメニューを開き、弄り始めた。

「ユースケ！ 何か面白いモノは出来たか」

悠介がソルザツクの店から帰ったと聞いて部屋にやって来たヴォレットは、扉を開けたところで思わず足を止めた。

ソファーに腰掛けた悠介が、その体勢のままスーッと目の前を横切っていく。悠介はソファーの足にギアボックスと車輪を取り付けて、『動力付きソファー』を試作し、自走実験を行っていた。

「わはははっ、なんじゃそれはー！」

動くソファーに大喜びのヴォレットは、『わらわにも座らせろ』と悠介の膝に飛び乗る。

「おいおい、つて……これでも動けるのか、パワーは問題ないな」

「スン！ お前も来い」

「えっ！」

「え？」

ヴォレットの呼び掛けに一瞬驚くような声が応えた。悠介がそちらに視線を向けると、扉の前にスンがいる。実はスンも連れてきていたのだ。最近はずっかり着慣れてきたドレス姿のスンが、遠慮がちに部屋へと入って来る。

「えっと、じゃあ……失礼します」

「ちよ……っ」

右膝側に寄ったヴォレットの隣、悠介の左膝にそっと腰を下ろすスン。

「おお、三人乗っても大丈夫じゃ」

「凄いですねー」

どっかで聞いたようなフレーズに、『どこの物置だ』と思いつつ、何とかソファーを自走させている試作ギアボックスのパワーに、悠介は実験の成功を確信した。このまま研究を進めていけば、当初思い描いていた馬車の代わりになるような乗り物の実現も遠くない。

「ユースケさん、足、大丈夫ですか？」

スンは動くソファーにも気を惹かれていたが、先程から黙っている悠介に『重くないですか』と声を掛けて気遣う。



「ああ、それは問題ないんだけど……」

「ふふっ、気にするなスン。ユースケはわらわ達の尻の感触を楽しんでおるだけじゃ」

「えっ！」

「をいっ！」

『もうお前等降りろっ！』と怒って見せる悠介だったが、ヴォレットは『駄目じゃ』で済ませた。スンは照れてもぢもちと顔を伏せている。

そんな調子でいつもの如く騒いでいる悠介の部屋を、ヴォレットを探して宮殿中を歩き回っていた專屬警護兼教育係殿が訪れた。

「やはりここに居ましたか姫様、そろそろお稽古の——」

ヴォレットとスン、二人を両膝に座らせた悠介の乗ったソファアが、ゴロゴロと車輪を鳴らしながら部屋の中を走っている。理解に苦しむ光景を前に、クレイヴォールは思考を数秒ほど麻痺させた。数秒で済む辺りに、慣れを感じさせる。

「やあーじゃあつ！ 折角面白かったのにいー！」

「我侬を言わないでください」

子供のように駄々をこねる姫君をズルズルと連行して行くクレイヴォール団長。彼の苦勞を心の中

で労^{ねどろ}いつつ見送った悠介は、残されたスンと苦笑し合う。

「宮殿の暮らしには、もう慣れたか？」

「はい、あんまり贅沢に慣れちゃうと村での生活に戻れなくなりそうで、少し怖いくらい」

「そっか、確かになあ」

宮殿で暮らしていると、毎朝の水汲みも食事の支度も、果ては着替えの用意まで使用人達がやってしまうので、色々鈍ってしまうという。

「この前のシンハの様子からして、またスンを狙うとは思えないけど……今の騒ぎが片付いたら一度ルフク村に戻るか？」

「そうですね……あ、でも先生の邪魔しちゃ悪いですし」

「ふふつ、そういやそうだったな」

「それに、行き帰りも大変ですしね」

高速走行の補佐付きで衛士隊馬車を走らせても、ルフク村との往復にはそれなりに時間が掛かる。村まで角石でも繋ぎ合わせれば、パウラの長城戦の時のように一瞬で行き来が出来るのだが、それには膨大な量の角石が必要になり、あまり現実的とはいえない。

「まだイメージの段階だけど、資材の問題もクリアできる方法があるんだけどね」

悠介は、カスタマイズ能力の性質を利用した、連続瞬間移動なる新たな移動法も構想していた。

サンクアディエットの街中でなら、床石の入れ替えでどこにでも一瞬で移動できる。そこから思いついた方法で、イメージ通りに出来れば少ない資材でとんでもなく効率の良い機動力を得られるはずだ。

「まあ、どっちみちカスタマイズ能力を前提にした方法だし、俺がいないと使えないんじゃないあんな意味ないよなあ」

今ソルザックと共に進めている動力の研究では、一度に大勢を運べるバスのような乗り物をカルツイオ中に走らせるという計画も視野に入れていた。

尤も、それはソルザックと悠介が二人して語り合う中で思い浮かんだ、妄想に近い将来の発展図に過ぎないのだが。

「とりあえず、街の中でそれなりのモノを走らせる事からだな」

「この動く椅子が、街の中を走るようになるんですか？」

「いや、それはそれで面白そうだけど……」

ソファアの行き交う街の光景を想像して思わず嘖き出しそうになりながら、まずはヴォレットの乗るゴーカートを作るべく、悠介は動力付きソファアの解体を始めるのだった。

◇◇◇

カルツイオの大地の中央部に広がる巨大な湖。『月鏡湖』^{つきかがみこ}と呼ばれるこの湖を挟んで、フォンクランクの対岸に位置する伝統ある国、ノスセンテス。

その首都である古都パトルティアノーストには、ノスセンテスの中枢的な役割を担う施設、神議堂と呼ばれる建物があった。ここには、国家の意思決定機関である『神議会』のメンバーが集まり、日々政策の議論が行われている。

ノスセンテスでは、古都に住む各神技の民から二人を神議会メンバーとして選出し、彼等を中心とした議会によって国家を運営する合議制が敷かれていた。しかしメンバーの選出に民意が反映されていないわけではなく、実質は少数による独裁制と言えた。

その神議会で今、ガゼッタ勢力とフォンクランク闇神隊隊長への対策会議が行なわれていた。

「さて、例の報告についてだが……ガゼッタ勢力と闇神隊長の繋がりは確かなようだ」

「我々の諜報^{ちやうほう}によると、ガゼッタは闇神隊の特殊な神技を目標に自国へ呼び込もうとしているようだな」

「闇神隊長の『ユースケ』なる者は、無技の村で育てられていたそうではないか」

「ガゼッタが付け入ろうとしているのもそこか……」

無技の民を保護する条例公布を働きかけるなど、『ユースケ』の一連の行動に見られる無技との繋がりを分析する。ガゼッタとの繋がりを指摘してフォンクランク内でのユースケの立場を貶め^{おとし}ても、ガゼッタへの亡命を誘発する可能性に繋がる。結局はガゼッタを利するだけだ。

それならばこちら側から先に手を打てないかと、闇神隊長の取り込みを検討する中で、彼の正体に議論が及ぶ。

「ガゼッタが『ユースケ』を邪神として扱っている事についてはどうか」

「本当に邪神なのか、邪神に担^{かた}ぎ上げようとしているのかは分からぬ」

「だが、ガゼッタのどこかに今も生きているという『アユウカス』が予言したのであれば、本物だろう」

「その場合は、なんとしても邪神を手に入れるか、滅ぼさなくてはならない」

彼等もガゼッタの白族と同じく、邪神が実在する事や、その役割というモノを知っていた。それは古くから神議会メンバーという形でノスセンテスを担^{にな}ってきた彼等一族に、代々言い伝えられて来たものだった。

その言い伝えにある、『アユウカス・イクドウト』。邪神の降臨を告げると言われる者の搜索も、昔から続けられていた。

「アユウカスが潜伏していると思われる白族の里は、未だ場所が割れず、邪神の真偽を確かめる術はない……」

「暫くはガゼッタとフォンクランク、双方の動きを注視するでしょう」

「ブルガーデンは如何に動くか……」

「あの国はフォンクランクに叩かれたばかりだ。これから切り崩され、やがて消えるだろうて」

『フォンクランク国内から無技の民を減らす為、またガゼッタに流れないようにする為、ガゼッタに恭順しない者を処刑するという名目で、ガゼッタ軍が無技の村を襲撃している』かのように装ったフォンクランクの陰謀……と見せ掛けた、ノスセンテスの陰謀。

更に亡命者ヴォーメストを使う事でブルガーデンが裏で糸を引いていたかのように装い、ブルガーデン、フォンクランク、ガゼッタと三つ巴の争いを展開させる計画だったが、一時中断して様子を見る事となった。

四大神信仰発祥の地にて、その神を造り上げた未裔達は、闇神隊長に纏わる情報を分析、吟味して結論を出した。

「では、闇神隊長の取り込みについては、この方向で宜しいか」

「うむ……それで問題あるまい」

『ユースケ』の取り込みに関する謀が纏められると、そのあまりに古典的な方策内容に、思わず

鼻を鳴らした一人が呟いた。

「まこと、いつの時代も英雄などと呼ばれる存在は、色欲深きモノよな」

2

エスヴォブス王が会談から戻り、ブルガーデンとの間に締結した協定や取り決め、補償などが発表されると、ようやく両国の交流が復活した。元々禁じられていた訳では無いが、大多数の商人達が取り引きを自重していたのだ。

これに伴い、滞っていた流通も活発になり、フォンクランクとブルガーデン双方の街で、物価が安定し始めるのだった。

「やあ、ユースケじゃないか」

そろそろ次の神技の指輪を作ろうと、下街へ買い物に出た悠介は、高民区の通りで炎神隊員ヒヴォデイルに会った。

「よう、怪我はもういいのか」

「あの日の内に水技で治癒済みだよ。休暇も貰ったし、もう平気さ」

『また下街へ行くのかい?』と低民区の様子に興味を持つヒヴォデイルと二人して、他愛無い話をしながら通りを歩く。街を行く時は常に馬車を使っていたヒヴォデイルも、最近は自分の足で歩く姿をよく見掛ける。

中民区との区画門近くまで来た時、通りの角からこちらにパタパタと駆けてくる女性に気が付いたヒヴォデイルが声を掛けた。

「これはこれは、ラサナーシャ殿。今日も御美しい」

「あら、ヒヴォデイル様。お久しぶりです」

誰? と目で問う悠介に『彼女は唱姫だよ』と答えるヒヴォデイル。サンクアディエットには高級娼婦の中でも最上級にあたる唱姫が六人存在し、彼女は第三位の唱姫だという。

腰の辺りまで伸びた水色の髪と瞳、髪のは少しウェーブしている。見た目はブルガーデンのリシャレウス女王を彷彿させるが、ラサナーシャはどちらかというと庶民的な雰囲気を感じていた。

「もしや、今日はエスヴォブス王の所に?」

「いいえ、ちよつと上の役人さんに呼ばれちゃいまして」

最近ディアノース砦での会談に出席していた官僚達から呼ばれる事が多いという。『なるほど』と、納得気味に頷くヒヴォデイル。ラサナーシャは、高価だが似たようなドレスが増えてしまつて、嬉しいやら困るやらと苦笑した。

「それでは急ぎますので」

「ああ、引きとめて悪かったね」

「ユースケ様も、失礼します」

迎えの宮殿馬車に乗って去っていく彼女を見送る悠介達。ヒヴォデイルが同意を求めるような口調で呟いた。

「やはり、ブルガーデンの女王に中てられたつてところなのだろうかねえ」

「なんのこっちゃ?」

首を傾げる悠介に、ヒヴォデイルはふふふと顎に手を当て、芝居掛かった仕草で得意気に語り出した。

「何の話か分かつてなさそうなユースケに、今の会話の概要を僕が説明してあげよう」

「好きにきなさい」

ヒヴォデイルの説明によると、ブルガーデンとの会談に出席していた高級官僚達からラサナーシャへの依頼が増えており、それに伴つて彼女の元には官僚達から高価で美しいドレスが衣装として贈られている。だが、それがどれも似たり寄つたりなのだという。

要するに、水色の髪に瞳、歳の頃も似ている唱姫の彼女を、ブルガーデンの女王様に見立ててごにょごにょ……という話。

「コスプレかよ……」

思わず突っ込む悠介であった。

とある伯爵の屋敷に呼ばれた唱姫ラサナーシャは、人払いのされた私室へと通された。この屋敷には月に一度の割合で訪れているが、それは唱姫としての務めを果たす為ではない。

中央に豪華な天蓋付きベッドが置かれているだけの部屋。シンプルだが凝った装飾が高級感を漂わせる。厚いカーテンの下がる奥の窓際から、屋敷の主が声を掛ける。

「仕事だ、ナーシャ」

「……はい」

「神議会から、闇神隊長を亡命させられないか、もしくはノスセンテスに大使としても寄越せないかという指令が届いた」

「亡命、ですか……？」

この伯爵は、フォンクランク内部に潜む^{ひそ}ノスセンテス神議会のシンパである。そしてラサナーシャは、彼の後ろ盾によって得た唱姫の身分を利用して諜報や懐柔を行う、謂^いわば特殊工作員のような立場にあった。

今回は、話題の闇神隊長をノスセンテスへ亡命させるという任務がもたらされたようだ。

「彼を亡命させるというのは、今の優遇された環境から考えて無理があるのでは？」

「それは分かっている、そこで君の出番という訳だ」

闇神隊長の女癖の悪さを利用するのだと説明しながら、伯爵はベッドに腰掛ける。ラサナーシャは伯爵の前に跪^{ひざまず}くと、その膝の上に頭を載せた。さらさらと手触りの良い水色の髪が、無骨な指に梳^すかされる。

「君も噂に聞いていよう」

「確かに、そういう噂はよく耳にしますが」

まず、闇神隊長をラサナーシャの魅力で誘惑^{とりこ}して虜にする。但し、ヴォレット姫に睨^{にら}まれないよう適度な距離を保ち、とにかく親しくなる事を優先する。

その中で、それとなく会話の中に『ノスセンテス是一部で性に開放的である』という内容をアピール。自身がノスセンテス出身である事、近々里帰りを考えている事などを伝え、興味を持たせる。更にノスセンテスの貴族に求婚されている事を仄めかし、『本当はあまり帰りたくないんだけど、妹がいるのでそうもいかない』と憂いを見せて気を惹く。その反応を窺いつつ、『本国の妹は自分のような娼婦の世界とは無縁の普通の少女』と餌を撒く。

『妹』役の人材は、闇神隊長の『好み』の情報に合わせて用意しておくそうだ。

一方、伯爵は宮殿上層に働きかけ、ガゼッタという共通の脅威に対し、同じ四大神を崇^{あが}める等民

制国家として協力し合おうという風潮を作る。そして闇神隊が親善大使としてノスセンテスに派遣されるよう仕向ける。

ラサナーシャには闇神隊長にノスセンテス行きの動機を作らせ、伯爵自身は闇神隊を送り出す機会を作るのだ。

「方法は任せる、上手く惹きつけろ」

「分かりました」

頬をスツと一撫でされた彼女は伯爵の膝から頭を起こす。これが終了を示すいつもの合図なのだ。余談だが、伯爵は『女性の髪を撫でる』事で気分が満たされるという、少々変わった性癖を持っているらしい。

「それと、今月の分だ。体調はしっかり管理するように」

「あ……はい、ありがとうございます」

伯爵が差し出す深い青色の液体が詰まった薬瓶を受け取ったラサナーシャは、それを大事そうに懷に仕舞うと、屋敷を後にした。

カスタマイズ用の指輪を購入した帰り、悠介はソルザックの店に寄っておこうと中民区を歩いていた。低民区を見渡せる防壁沿いの公園を通りかかった時、柵の手摺りに頬杖についてぼーっとし

ているラサナーシャを見つけた。

朝方出会った時とは雰囲気の違い、どこか陰のある表情が気に掛かる。

「あら、こんにちは」

「あ、ども」

視線に気付いて自然な笑顔を向ける彼女に、悠介は先程までの表情を隠そうとするような取り繕った気配を感じた。

「お買い物ですか？」

「ええ、まあ」

薄化粧。香水も意識しなければ気が付かない程で、装飾の類も殆ど着けていない。

近寄り難い美しさではなく、自然な可愛らしさを伴う綺麗な女性という感じ。素朴な笑顔は、落ち着きがあって相手を安心させる。

これから帰宅するところだという彼女と、たまたま方向が同じだったソルザックの店まで暫く話しながら一緒に歩く。

「でも、噂ってアテになりませんね、ユースケ様でもっと怖い方だと思ってました」

「どんな噂かは聞かないでよく……」

「うふふっ、実はさっき初めてお会いした時も、私、内心ビクビクしてたんですよ？」

唱歌として仕事をしているだけに、女性としての魅力にはそれなりに自信があるラサナーシャは、街でまことしやかに囁かれている闇神隊長の『女癖』に纏わる噂に、恐々としていたそう。

「目を付けられてしまうんじゃないかって」

「ひでー」

そんな調子で和気藹々と会話を楽しんでいると、ソルザツクの店に着いた。悠介には、随分と短い時間だったように感じられていた。

「それでは、私はこれで」

「うん、またね」

軽く会釈して通りの向こうへと去って行くラサナーシャを見送り、悠介は来店の鐘を鳴らすのだった。

扉を潜るなり、店内のカウンターに居たソルザツクが物凄い勢いで詰め寄ってきた。

「今の女性！ 唱歌じゃありませんでしたかっ？」

「ああ、そうだけど」

「か、買ったんですかっ？」

「買わねーよっ！」

悠介はソルザツクの勢いに少し面食らいながら『ちょっとその公園で会ったので、話をしながら歩いただけだ』と説明した。

ソルザツクは凄く羨ましそうな表情を見せている。唱歌は宮殿関係者の中でも、高級官僚しか相手にしない超高級娼婦。個人的に親しくなるだけでも、周囲から羨ましがられるのだ。

「また噂が盛り上がりそうですね」

「勘弁しろよ……」

何故か棒読みなソルザツクに、女遊びなんて全くしてないぞと呆れる悠介。

「まさか姫様とそういう関係に至っているとまでは思っていないませんが——街唱（娼婦）くらい普通に利用してるでしょう？」

「いや全然」

「え、まったく？ これっぽっちも？ もしや姫様に禁じられているのですか？」

「んにゃ、別にそういう事はないけど……」

顎に手を当て、小首を傾げて何か考える素振りを見せたソルザツクは、ポンと手を打ち、納得の表情でにこやかに言った。

「ああ、確か子供にしか興味が——」

「それは違う！」

「あ……もしや男色で——」

「断じて違う！」

憧れの唱姫とも容易く談笑してしまう悠介への嫉妬からか、やけに絡むソルザックであった。

宮殿の自室に戻って来た悠介は、神技の指輪をひとつ仕上げて一息吐いていた。今日も今日とて悠介の部屋に入り浸って実験製品で遊ぶヴォレットとその付き添いのスんに、昼間の事を愚痴る。

「やたら絡まれてさー」

「わははっ、ある意味それは仕方あるまい」

唱姫と言えば高級な女性の象徴であり、その性的な魅力のみならず、包み込むような優しさに憧れる男性も多いという。

「ユースケさんは、女性に興味がないんですか？」

「凄く心配そうに言うのは止めてくれ、スン」

普通に興味はあるぞとアピールする悠介。

「その割には、まだスんにチューのひとつもくれてやってないそうではないか」

「っ！ ヴォレット様！ わたしは別にそんなつもりは……」

「無いと申すか、無いと申すか」

「きゃっあっちゃつとそこはっ……！ やんっ」

ヴォレットは、こやつめこやつめと全身を満遍なくつんつんして遊び始める。こういう年相応のじやれ合いが出来るのも、宮殿内ではこの部屋くらいであった。

ヴォレットの私室は常に使用人が控えているし、スンの客間に居る時は外に護衛の衛士が立つ。部屋の中できやあきやあと騒ぐものなら、『何事ですかあ！』と踏み込まれ兼ねないのである。

「この期に及んで何を照れておるか。自覚が無いわけでもあるまい？」

「いえ、あの、その……」

背中から抱きついて耳元で囁くヴォレットと、赤くなってしどろもどろになるスン。女の子同士の過激なスキンシップにちよつと中てられ気味な悠介は、軽く溜め息を吐きつつ御転婆姫様を引き剥がす。

「反応がお約束過ぎるぞ、スン。ヴォレットもあんまりスンをからかうなって」

「……こやつが一番自覚がないようじゃ」

「ん？」

目の前で露骨に練り広げた挑発にも期待した反応を示さず、なんのこっちゃと首を傾げる悠介に、肩を竦めてぼやくヴォレット。

「スンも苦労するのう」

「……」

無言で肯定の意を返す、ちよつぱり溜め息気分なスンなのであった。

3

「お、こんちゃー」

「あら、こんにちはユースケ様。最近よくお会いしますね」

闇神隊の下街巡回任務が再開されて数日。低民区や中民区を歩き回っている悠介は、ラサナーシャと頻繁に遭遇するようになった。

悠介は、これまでも普通にすれ違っていたのかもしれないが、知り合ってからはその都度声を掛け合うようになったので、そう感じるだけなのだろうと認識していた。

「今日もお仕事ですか？」

「まあね、何か面白い話とかある？」

ラサナーシャは『サンクアディエツトはいつも通りだけれど、ノスセンテスで新しい娼館しょうかんが出来たという話を聞いた』と話題を振った。

「ノスセンテスか……」

「私、実はバトルティアノースト出身なんですよ」

続けて、向こうに妹がいるという話に持っていく。少し家庭の事情をこぼすように『妹は普通の一般民』『姉が唱姫である事は知っている』『たまた家に戻った時は唱姫の事で口喧嘩しちゃう事もある』などと漏らし、気を惹こうとする。

「お姉さんの事を心配してるんだろう」

「私も、そうだと思います」

会話を楽しみながらも、『何故この仕事をしているかは聞いていちゃいけないんだろうな』と気を使う悠介。その時、不意にラサナーシャの身体が揺れた。立ち眩くらみでも起こしたようにふらつくと、お腹の辺りを押さえて屈みこむ。

「あ……ちよつと、ごめんなさい……」

悠介に背を向けつつ、懷から薬瓶を取り出して中身を少し口に含むと、体内の痛みを発する部分に水技の治癒を行う。

（今朝飲んできたはずなのに……最近発作の周期が早まっている？）

密かに不安を懷なきながらも、ラサナーシャは治癒の効果が患部に広がって行く感覚を得て、何とか気持ち落ち着けた。

「大丈夫か？ どこか悪いのか」

「いえその……昔からちよつと」

持病の事が知られば興味を失われるかもしれないと焦り、誤魔化そうとするラサナーシャ。一方、具合の悪そうな彼女を心配した悠介は、『知り合いに治癒の専門家がいるのでなんなら診て貰うか？』と勧める。

「治癒の腕は確かな人だよ、ゼシャルドつて聞いた事ないかな？」

「あ、知ってます。元宮廷神技指導官のゼシャルド様ですね」

発作の周期が短くなった事も気に掛かるし、悠介と親しくなる切っ掛けにもなると判断した彼女は、ゼシャルドに診察をお願い出来るよう取り計らって貰う事にした。

翌日の昼過ぎ、ラサナーシャが宮殿を訪ねて来た。昨日の内にヴォレットにも話を通して準備も済ませておいた悠介は、闇神隊メンバーと共に衛士隊馬車に乗り込んだ。良い機会なので、スンも一緒に連れて帰る。

宮殿の馬車乗り場では、悠介が私用で唱姫を連れているという噂を聞きつけた神民衛士や宮殿衛士達から、嫉妬の目を向けられる事となった。

「じゃあ行ってくるよ」

「うむ、道中気を付けるのじゃ」

普段と比べると不自然に人の多い馬車乗り場にて、悠介達を見送るヴォレット。

最初、悠介から唱姫をルフクの村に連れて行きたいと言われた時は流石に驚いたヴォレットだったが、ラサナーシャの事情を聞いて納得し、後は任せると許可を出してスンと共に送り出した。

唱姫の事情とは、病気の事を公にはしたくないという事だ。唱姫として、病気を患っているというのは評判に関わる。伝染する病気ではないとは言え、やはり偏見と猜疑の目を向けられるだろう。悠介達が発見した後、用も無いのに馬車乗り場に集まっていた衛士達は、それぞれ自分の持ち場へと散らばって行く。疎らになる人込みの中にソルザックとヒヴォデルが交じっているのを見つけたヴォレットは、二人を呼び寄せた。

「二人ともちよつとわらわの私室に來い。戻るぞ、クレイヴォル」

専属警護兼教育係を従えて婚約者候補組纏め役と闇神隊専属土技師を私室に連れ帰ったヴォレットは、二人に悠介とラサナーシャに関する風評対策について話す。

周囲の有象無象に『唱姫は体調が優れないので大事をとってゼシャルドの診察を受けに行つた』『闇神隊はその護衛である』という噂が広まるよう手を打つのだ。

宮殿衛士隊や上層の人間はヒヴォデルに任せ、商売人や一般民にはソルザックを使う。雑談や噂話で今回の話題が上がった場合は、この内容で定着させるよう指示を出す。

「よいかお前達、ボロを出さないぞ？」

「はっはっはっ、情報操作ならこの僕にお任せあれ！」

「ああ……私も一緒に行きたかったなあ」

珍しい取り合わせとなった三人を微妙な面持ちで見つめるクレイヴオルは、内心ヴォレットの動きについて考察していた。思い付きの暴走とお強請りばかりだった今までとは違う。

（姫様自ら情報工作に動く、か……まだまだ子供の遊び、と断ずるのは簡単だが――）

成長の片鱗を見たような気がして、いつもより眉間の皺を増やすべきか減らすべきか、複雑な心境のクレイヴオルだった。

ルフク村を指して街道を行く、闇神隊一行を乗せた馬車。出発前に『後は土が揃えばパーフェクトハールームっすね』と、風評でしかない悠介の女性関係を仄めかすような事を口走ってエイシャに睨まれていたフォンケ。通常なら下っ端の衛士などには会話の機会すらない唱姫の同行にテンションが上がったせいか、風技の補佐に集中しながらもラサナーシャに目を奪われるという器用な事をやっていた。

ヴォーマルは満更でもない様子で手綱を握り、シャイードはいつものように沈黙していたが、珍しく緊張したような雰囲気漂っている。エイシャとイフォカも、ラサナーシャにちらちらと視線

を送っていた。悠介はスンも交えてラサナーシャと談笑中である。

「御二人とも、ゼシャルド様の事を凄く信頼してらっしゃるんですね」

「はい、先生はとても良い人ですから」

「割とおちやめなところとかもあって、とつつき易い爺さんって感じなんだよな」

しかし単に人の良い爺さんではない。亡命を装って単身でブルガーデンに乗り込み、女王の信頼を得て組織を立ち上げ、内部から反フォンクランク勢力を壊滅に追い込むという偉業を成し遂げた『猛者』でもある。

ラサナーシャは、ルフク村訪問の報告に行った際、伯爵から『十分に注意せよ』と促されていた。悠介達との談笑で表情に出さずとも、ゼシャルドとの接触に若干の緊張を覚えているのだった。

「おお、来たかユースケ、スン」

「ただいま、先生」

「ちーす」

夕方頃、闇神隊一行はルフクの村に到着した。悠介達が来る事は村に駐屯している衛士隊に風技の伝達で告げてあったので、ゼシャルドもわざわざ出迎えてくれた。

村には衛士隊用の仮設兵舎などが建っており、村を囲む防護溝の内側には簡単な柵も作られてい

る。付近の無技の村を襲っているという、例の武装集団に備えたモノであった。

「あ、ブルーシャさん」

スンが世話をしていた畑は、今はブルーシャが管理していた。生きる為に命を狩っていた彼女にとつて、命を育て、収穫してはまた育むという生命のサイクルは、感じ入るモノがあるようだ。

何故かメイド服姿のブルーシャとぼつぼつ会話をしながら、スンは畑を見ている。ヴォーマル達は仮設兵舎で休むらしく、ラサナーシャの荷物持ちをやるうとしていたフォンケをズルズルと引き摺って行った。ちなみに、仮設兵舎ではバハナが中心となって衛士達の食事などを世話している。

『隊長だけずるい』と叫んでエイシャに踏まれているフォンケに、悠介は溜め息を吐く。

「あいつ……お気に入りの街唱がいて入り浸ってるって話だったのに」

「うふふつ、私達唱謡うたうたいは所詮一夜を慰める遊戯の相手。本気になったは駄目ですよ？」

爽やかに濃厚な事を言われた気がするなあと思いつつ、悠介はゼシャルドと共にラサナーシャをゼシャルドの家に案内した。

「うむ、元気にやつておるようじゃの」

「おかげさまで」

診察室としても使われる広間の椅子に腰掛けたゼシャルドは、神技の波動を高めながら悠介達にソファアに座るよう勧める。

「しかしまあ、唱姫を連れてくるとは、お主も——さて、ラサナーシャ殿じゃったかね？」

「え？ あ、はいっ、御初にお目に掛かります」

「……………って、途中で言うの止めないでくださいよっ」

『すっげー気になるんですけど！』と騒ぐ悠介をスルーし、和やかな挨拶を交わしてラサナーシャをリラックスさせたゼシャルド。早速診察の水技を行使して患部を探り出すと、治癒を施して様子を窺う。

「ふむ……朽病くつびょうじゃな」

「……はい」

ゼシャルドの確認に重苦しく頷くラサナーシャ。彼女が患う『朽病』とは、身体の内部に出来た腫瘍しゅようが全身に広がり、それが他の色々な病も併発させ、やがて患者を死に至らしめる病気。

（癌がんみたいなもんか……）

朽病の概要を聞いた悠介はそう思った。

発症率はさほど高くはなく、水技の治癒によって症状を抑える事も出来るが、完治した例は無いと言われている。

「ふゝむ……大分、進行しておるのう。補助薬は持っておるかね？」

「あ、はい……ここに」

薬瓶を取り出したラサナーシャは、ゼシャルルドに促されてその青い液体を口に含んだ。治癒補助薬と水技の治癒を併用すれば、朽病の進行をかなり抑制する事ができる。彼女は普段からそうやって病気の進行を抑えているのだ。

補助薬の効果が表われるのを待ってから、ゼシャルルドは水技を行使する。自身のモノとは比べ物にならない程の強力な水技によって、ラサナーシャは身体の調子がかかなり良くなった事を実感した。

「どうじゃね？」

「凄いです……こんなに身体が軽くなったのは久しぶりかも」

治癒補助薬を使った水技の治癒は、腫瘍の広がりや転移を抑制出来るし、強力な治癒なら腫瘍そのものもある程度は削る事が出来る。それでも完全に消し去る事までは出来ない為に、『朽病は不治の病』とされている。

ラサナーシャも、自らの水技で体内の腫瘍を感じ取る事が出来る。昨日までと比べて明らかに腫瘍の範囲が小さくなっている事を確認し、流石は元宮廷神技指導官、とゼシャルルドの実力に感嘆していた。

「その薬って、昨日飲んでたやつ？」

「はい、そうです」

悠介は彼女が手にしている薬瓶について訊ねた。非常に高価な薬で、ノスセンテスでしか精製されていない希少なモノらしい。フォンクランクにも輸入されているが、入手は困難だという。

中身が半分程になった治癒補助薬の薬瓶を『ちよいと失礼』と見せてもらう悠介。

「ふーむ、どれどれ？」

悠介がカスタマイズ・クリエート能力によるメニュー画面を開くと、その気配を感じ取ったゼシャルルドは静かに見守る。急に悠介を観察するような雰囲気を感じたゼシャルルドに戸惑いを感じながら、ラサナーシャは両者へと交互に視線を向けた。

治癒補助薬のステータスを確認する悠介。

「直接回復させるタイプじゃなく、回復効果を高めるやつか」

「それも、弄れそうかね？」

「ええ、まあ一応は……でも相当強力な薬みたいだし」

服用者の身体に強い影響を与える薬なので、迂闊に弄れないというニュアンスを仄めかす。

「なあに、それならワシが鑑定できるぞい」
ゼシャルルド級の治癒系水技を使う者は、その薬がどんな効果を持ち、人体にどんな影響を与えるのかを調べる事が出来るという。

水技と土技は特に、鉱石や液体から特定の成分を抽出したり、溶媒を生成したりと、薬品精製の

分野にも長^たけている。

しかし、高い効果を持つ薬は水技による調整は勿論、土技や炎^{えんぎ}技、風技も駆使して様々な工程を経ての精製が必要だ。補助薬のような特殊^{かく}且つ強力な効果を持つ薬の精製も、やはり水技や土技のみでは難しい。

「補助薬の製法はノスセンテスが独占しておるでな、良い薬が出来ると助かるんじゃないかのう」

安全面は保障できるので、高い治癒効果を持つ薬にカスタマイズを施せるならやってみてはどうかと促すゼシャールド。それを元に安価な薬をより効果の高いモノへと調整出来るようになれば、民の暮らしにも大いに役立つだろうと。

悠介は唸りながら考える。

（弄^{いじ}るならまずサンプルとして元の薬が何本か欲しいところだけど、フォンクランクじゃあ中々手に入らない代物だしなあ。ノスセンテスに出向いてみるか？ 他にもこの病^び気で苦しんでる人もいるだろうし……）

「やっぱ直接買いに行った方が手っ取り早いですかね？」

「うむ、向^むこうには他にも色々と役立つ薬が売られておるからの。お主^{じま}が直^{じか}に見^み定めた方が良いでしょう」

二人の会話の意味が分からず、ラサナーシャは唯^{ただ}々キョトンとしながら成り行きを見守っていた

が――

「じゃあ、ヴォレットにも相談してみますよ、ノスセンテスまで出張できないかなーって」

思わぬところからノスセンテス行きの理由が出来て、びつくりするラサナーシャだった。そして心の中に疑問が湧く。

（ユースケ様って、本当に噂^{うわさ}されてるような女癖^{めがせ}があるのかしら……？）

あの内気^{いけ}そうな風^{ふう}技^ぎ使^{つか}いの部下^{ぶか}が悠介に向ける眼^め差^さしは、上司^{しゅうし}に権^{けん}力^{りき}で手^て籠^{かご}めにされたとはとても思えない尊敬^{そんけい}の籠^{かご}もったモノだった。それに何故か宮殿^{きゅうてん}に住^すんでいるらしい無^む技^ぎの少女^{しょうじょ}からも、悠介の事を信^{しん}頼^{らい}して慕^もっている様^{よう}子^こが感^{かん}じられる。

ともあれ、悠介がノスセンテスに赴^{おもむ}く理由は確^{たしか}保^ほ出来た。ラサナーシャは心の中の予定^{よそ}帳^{ちやう}に、伯爵^{はくしやく}への経過^{けいこ}報告^{ほうこく}と、闇^{やみ}神^{しん}隊長^{たいさう}の人柄^{にんがら}に対する情^{じやう}報^{ほう}精^{しやう}度^どについての疑^ぎ問^{もん}を記^きすのだった。

夜――

ゼシャールドの家の広間ではスンと悠介、ゼシャールド、ブルーシャがそれぞれ向かい合わせのソファ^{ソファ}ーに腰^{こし}掛^かけてお茶^{ちや}などを飲^のみながら、夕食^{ひやうしき}後の一^{ひと}時^{とき}を過^{すご}ごしていた。ラサナーシャは、大事^{だいじ}をとって先に客室^{きやくしつ}で休^{やす}ませている。

ゼシャールドからノスセンテスについてのアレコレを聞いていた悠介は、話が一段落^{いちだらく}したところ

で徐に、気になっていた事を訊ねた。

「ところで、なんでメイド服なんですか？」

物静かというか、一見ボンヤリしているようにも見えるブルーシャは、悠介の疑問にいつもの眩
きのような口調で答える。

「……ルードが、この方がいいって言うから」

そう言っただけだとゼシャルドを見る。

「ルード？」

「ん……まあ、ワシの若い頃の愛称というか、呼び名での」

一瞬、広間の空気が固まる。

「愛称で呼ばせて……」

スンがポツリと眩き、悠介はツツコミ態勢に入った。

「先生なにやってんすか」

「ほっほっほっ」

賑やかな空気の中、ブルーシャは両手で包み持つカップの温かさにはんやりしている。

「……（お茶、おいしい）」

とても平和な夜だった。

4

「本当にお世話になりました、おかげさまで随分と楽になりました」

「うむうむ、また体調が悪くなったらいつでも来なさい」

翌日、早朝からルフクの村を出発した悠介達は、朝の内にサンクアディエットへの帰還を果たした。
自宅に帰るラサナーシャとは宮殿前で別れる事になったのだが、フォンケがちやっかり家まで送
ると申し出て、宜しくお願いされている。すかさず、ヴォーマルも御者台に座りなおす。

隊長ユナタの許可を得たフォンケとヴォーマルが馬車でラサナーシャを送って行くのを見送り、他のメ
ンバーはいつも通り衛士隊の控え室へ。悠介はヴォレットの部屋まで報告に上がるのだった。

「つーわけで、ノスセンテスまで薬買いに行きたいんだけど」

「ふーむ……」

今回の報告と共に薬の仕入れを提案されたヴォレットは、複雑な表情を浮かべて考え込んだ。
やはりノスセンテス行きには何か問題があるのだろうかと小首を傾げる悠介。そんな彼に、クレ

イヴォルが闇神隊の新たな任務について、ノスセントスへ親善大使として王の親書を届ける役が検討されている事を告げた。

「大使！ て……俺そういう政治的な仕事は要領とか全然分からんぞ？」

「なあと、大使役はちゃんとした者を付けるのでそこは問題ない。そうじゃろう？ クレイヴォル」闇神隊を使うのは体裁の為だろうと指摘するヴォレットに、頷いて肯定を示すクレイヴォルは、内心感嘆する。彼が自分の役割を自覚しながらも、ヴォレットと悠介の活動に協力している理由が、時折ヴォレットに見せられるこの鋭い洞察力だ。

教育係としては、ヴォレットの姫君としての役割に不必要な活動は諫める必要がある。姫君が知る必要の無い情報を断ち、望ましくない人物との交流は控えさせ、由緒正しい血筋を持つ健康な姫君として立派に育て上げるのが彼の仕事である。

しかし、宮殿衛士隊の炎神隊を束ね、優秀な人材を育てる軍人としての彼の心が、ヴォレットの持つ才能に惹かれる。勿体無いと感じてしまうのだ。『このまま埋没させて良いのか？』と。

「ただのう、何か気になるというか……」

「？」

ヴォレットは今回の提案に今ひとつ気乗りがしない様子だった。悠介の言う朽病と治癒補助薬の事は理解出来る。しかし――

「よく分からんがの、なーんか引つ掛かるのじゃ」

殆ど勘に近いモノなのだが、なんだかモヤモヤするのだと唸っている。

「女の勘ってやつか？ それともラサナーシャさんへのヤキモチの類か」

茶化す悠介に空飛ぶお皿をべしーんべしーんとぶつけながらもヴォレットは、ノスセントスを探る意味でも確かに悪くない案かもしれないと思いつく。ノスセントスが無技の村襲撃事件の黒幕ではないかと怪しんでいるところでもあるのだ。

「向こうに疚しい事^{やま}があれば、闇神隊が探りに来たとビビらせられるじゃろうしな」

「あー、あの事件なあ……探るつっても諜報のノウハウとかも全然分からん訳だが」

「ふふっ、お前が密偵の真似事をするところなぞ想像もつかんわ」

闇神隊長がノスセントスの街中をうろつけば、それだけで牽制になる。適当に古都の見物でも楽しんでくれば良いと、ヴォレットは薬の仕入れに許可を出す事にした。

「薬の購入資金もわらわの方で用意しよう」

「そりゃ助かる。色々買い込みたいけど正直資金が心許^{こころもと}なかったからな」

カスタマイズによって緑晶貨^{みどりしょうか}（貨幣）を赤晶貨^{あかししょうか}に変える錬金術はあまり乱用したくないので、あまりがたく軍資金を頂戴しておく事に悠介。必要な薬品類は現地で見定める。

「しかし古都見物かあ。そういうや、向こうにはラサナーシャさんの妹さんがいるって言ってたな」

「ほう？ 唱姫の身内とな？」

唱姫のプライベート情報を何気に入手している悠介に目を丸くしつつ、ヴォレットはふいに思い出した事を告げた。

「家と言えばユースケよ、お前の屋敷が明日にも完成するそうじゃぞ？」

「そっか、もうそんなに経つんだな」

ディアノース砦建設やパウラでの働きに対する褒賞^{ほうしょう}として与えられる事になった高民区の屋敷。悠介を自国に呼び込もうと画策するガゼッタから、今後も狙われる恐れのあるスンを街に匿^{かくま}うという目論みも兼ねて要求したモノである。

「どうせ大使を送る交渉はこれからのじゃ。先に屋敷を引き取ってスンを住まわせてから行けば良い。そうじゃろう？ クレイヴォル」

「ええ。屋敷の受け渡しが終わる頃には、ノスセンテスとも交渉が済んでいるでしょう」

クレイヴォルが、そう言っただけで予定を取り纏^{まと}めると、悠介もその方針に従う事にした。

「建築職人さん達に何か手土産でも持って行った方がいいかな？」

「別にいらんじやろう、気になるようならお前が調節した実酒でも用意してやればどうじゃ？」
それはいいアイデアだなど、悠介は早速実酒の入手に街へ出るのだった。

深夜、人目を忍んで伯爵の家を訪れたラサナーシャは、悠介がノスセンテスへ行く理由が出来た事を、一連の流れを説明しながら報告する。伯爵も王に話は通していたらしく、闇神隊の派遣が検討されている状況に手応えを感じているようだ。

「よし、第一段階は上手く運びそうだ」

第二段階として、闇神隊一行が親善大使として発^たつ前にノスセンテスの別荘へと赴き、妹役に会って段取りを付けておくようにと、伯爵はラサナーシャに任務の継続を告げる。

「向こうでは更に積極的に惹きつけていけ」

国外ならばヴォレット姫の目も届かない。存分に『姉妹』として酒池肉林の誘惑で虜にせよと指示を出す伯爵。それに対し、ラサナーシャは少し困惑顔を見せる。悠介に対する印象などから『闇神隊長に対する事前情報、人物把握に誤りがあるのでは？』と意見したが――

「ラサナーシャ、自分が何者か言ってみなさい」

「え？ 私は、唱姫です……」

「そうだ、我々によって与えられた唱姫という立場を持つ、我々の諜報員だ」

「……はい」

伯爵は情報の分析、諜報指示などは我々専門家が決める事だと諭^{さと}し、『君は指示に忠実であれば良い』と言葉を続けた。

「いいかね？ 我々は君の見解など必要としてない。君の役割は命令に従って情報を集める事と、時にそれを吹聴する事だ」

「も、申し訳ありません……差し出がましい事でした」

「よろしい。しかし、唱姫としてキャリアのある君をそこまで惑わすとは……」
病気を心配する慈悲深さで気を惹き、ゼンヤールドというコネを使って信頼を得る。更には民の為に高価な薬の買い付けに行くという、人道的な理由を掲げてノスセンテス行きを定める手際の良さ。

「人心掌握の手並みといい、予想以上のやり手だ」

闇神隊長の誑しぶりは噂通りだと、本人が聞いたらすっ飛びそうな人物像に納得する伯爵であった。

翌朝、完成した屋敷を引き取るため、悠介はスンを連れて高民区の一角にやって来た。

三階建ての石造りで、厨房や使用人の部屋、広間などを別にしても大小合わせて三十近い部屋がある。敷地には厩舎や馬車を停める車庫が設置されており、乗馬が出来る程度の広さもある。

「ちよつとでか過ぎないか？ これ」

「あれ？ ユースケさん、自分のお屋敷を見るの初めてだったんですか？」

スンはヴォレットに連れられて時々建築途中の屋敷を見に来ていたらしい。

一方、悠介の活動範囲は主に中民区以下だったので、最初に建設予定地を見て以来ソレっきりだったのだ。

「でも……改めてこうして見ると、本当に大きいですね」

見慣れていたとはいえ、ヴォレットとの視察はいつも馬車の中からだったので、直接全体像を見るとやはり大きいと感じるようだ。

「そうなのか。そんじゃまあ、とりあえず中に入ろうか」

屋敷に向かって並び歩く二人に、門前に立つ専属の衛士が悠介の来訪を敬礼で迎える。この時、門番の衛士が少し戸惑うような表情を見せたが、悠介は特に気に留めなかった。色々と例外を重ねて得た立場上、好奇の視線や困惑の表情を向けられる事には慣れているのだ。

正門から少し歩いて辿り着いた正面玄関の大きな扉を潜ると、中央広間にずらりと並んだ使用人達揃って悠介達を出迎えた。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「痒っ」

『ご主人様』の呼び名に背中がむず痒くなった悠介だったが、それが普通なのだから仕方ないと思いき直す。ちなみに、外に居た門番や専用馬車の御者を務める専属衛士達は、屋敷を管理する者とは

別系統で働く事になっている。

『後で呼び方の変更を申請しよう』などと考えながら、悠介は屋敷内を見渡した。左右に延びる廊下、広間の奥に見える向かい合った階段。彫刻や絵画など、金持ちや貴族の屋敷にありがちな美術品の類は飾られておらず、装飾も質素なれど、決して佻しい雰囲気ではない。

あまりゴテゴテした内装だと落ち着かないので、悠介は丁度いい感じだなと好印象を持った。

「……ん？」

不意に、使用人達から戸惑うような気配を感じて、悠介はそちらに気を向ける。ちらちらと注がれる彼等の視線の先には、高い天井を見上げているスンの姿。

どうやら使用人達の一部は、無技の民を『屋敷の住人』として住まわせる事に驚いているらしい。『無技を愛人しているらしい』という噂は本当だったのかなどとひそひそ囁き合っている。

実は、宮殿の一部官僚達は無技の民を特別視するような行動をとる悠介に不快と猜疑を感じており、『闇神隊長の影響で姫様まで無技を特別扱いする始末！』と不満を抱いていた。

同時に、ゼシャルド所縁の者とは言え、宮殿で当たり前のように過ごすスンの事も少なからず疎ましく思っていたのだ。

しかしながら、両者ともヴォレット姫のお気に入り。その上悠介は今や英雄とまで称されている。例の『神技の指輪』の件もあり、各宮殿衛士達の間でも悠介の機嫌を損ねるような真似は慎むよう

暗黙の了解がなされていた。

それ故の意趣返しというような認識で仕組まれた人事。悠介の屋敷にあてがわれた使用人は宮殿外から雇った者達で、スンが宮殿で客人として扱われている事は教えられていなかった。ぶっちゃけ嫌がらせである。

悠介の発案で始まった清掃業務によって、中民区辺りでも普通に無技人の姿を見るようになった。が、あくまでも仕事として、担当衛士の引率があつてこそ街中を歩けるのであり、等民制による身分の差が無くなった訳ではない。当然それは、人々の認識についても同じ事が言えた。

一般神民達にとって、無技の民は未だ等民制の枠から外れた存在なのである。

人事を仕組んだ官僚達は、スンの宮殿での立場は、ヴォレット姫あつてのモノ、姫様の気まぐれ戯れの類だと思っている。彼等はスンとヴォレットの信頼関係を理解していない。

この思惑通り、『一般神民の反応』を以って無技の娘に自分の立場を思い知らせるという事に成功していた。

『どうして無技がこんな所にいるんだ？』というような使用人達の訝しむ視線。それに気付いて身体を硬直させるスン。

元々神技人に対して強い恐怖心を持っていただけに、彼等の『友好的とはいえない視線』ダケでも、スンの心を萎縮させるのに十分だった。悠介がノセンテスに発てば、スンは一人この屋敷で

過ぎてす事になるのだから、余計に不安は募る。

人事の裏に隠されたささやかな陰謀を知る由も無い悠介だったが、普段の特殊任務によって培われた人間観察力によって使用人達と門番の戸惑いがスンに向けられている事を正確に把握した。

「……えーと、執事長さん？」

「ザッフィスと御呼びください、ご主人様」

「ん……じゃあザッフィス」

「はい、何で御座いますよう」

悠介は執事長に外にいる専属衛士隊も中へ呼ぶように伝えたと、屋敷で働く者全員を広間に集めて挨拶を行う事にした。最初の挨拶でハッキリさせておこうと考えたのだ。

「えー皆さん初めまして、闇神隊の隊長を任されている田神悠介です」

まずは無難に自己紹介からお辞儀に繋ぐと、使用人や衛士達も思わず釣られてお辞儀を返した。

そんな彼等の顔を見渡し、内心よしと気分を入れた悠介は、静かに語り掛けるような口調で続ける。「それとこの子はルフク村から連れて来たスン。訳あって最近まで宮殿で寝泊りさせて貰ってたけど、今日からこの屋敷で一緒に住む事になる」

さわさわと、先程とは少し雰囲気異なるざわめきが使用人達の間に広がる。宮殿に寝泊りしていたという情報に驚いているらしい。

悠介はここで少し語調を変え、訴えかけるように若干低い声色で言葉を紡ぐ。

「スンはゼシャールド先生から預かった大事な——友人であり、家族のような存在だ。無技人に対する偏見がある者もいるだろうが、責めはしない。但し、俺の屋敷で働くのには向かないと思う」

元宮廷神技指導官ゼシャールド。先のブルガーデンとの一件では闇神隊長と共に多大な功績を収めた、目の前の英雄と並び称される人物。そんな大物の名が出てきた事で、広間は更なる驚きに包まれる。

悠介の黒い隊服のマントの裾を掴んで、微かに肩を震わせるスン。そんな彼女をそっと抱き寄せながら、動揺する使用人や専属衛士達に向けて、悠介はキツパリと言い放った。

「双方の為にしないから、スンを屋敷の住人と認められない人は今の内に申し出てくれ」

顔合わせの初日早々からギアホークの、ディアノースの英雄の機嫌を損ねてしまったかと青褪める使用人達。

シン……と静まり返る中央広間。

「あー、そうか……ここで申し出ろつても酷だよな」

俯き加減に立ち尽くす使用人達を見て、悠介はバツが悪そうに頭を掻くと語調を緩めて言い直した。

「訂正する、今申し出なくてもいいから、午後にも申請して屋敷を出てくれて構わない、以上」

『一応、新しい就職先が見つかるように口利きはするよ』と付け加えると、悠介はスンを連れて屋敷の中を見て回り始めた。案内を申し出ようとした執事長を手で制し、『彼等の決断を見届けてくれ』と、広間で顔を見合わせている使用人一同を指し示す。執事長は静かに頭を下げて、主人の意向に従った。

「しかし、抜け穴とか隠し部屋が結構あるぞ？ これ」

カスタマイズメニューで屋敷の構造を見通す事が出来る悠介には、抜け穴らしき隠し通路や隠し部屋っぽい隙間など、全てが筒抜けである。それらは適当にカスタマイズで埋めておいた。

「……あの、ユースケさん」

「ん？ ちょっとは落ち着いたか」

「はい……ありがとう」

「気にすんな。よし、次は二階を見に行こうぜ」

屋敷の中を見て回る間、悠介とスンはずっと手を繋いでいたのだった。

結局、午後になっても屋敷を出た者は一人もいなかった。

5

翌朝、悠介は昨夜の内に済ませておいた旅の荷物をチェックしていた。普通は着替えなどを用意するところだが、汚れや綻びはカスタマイズでどうにでも出来るので、そのための布地や食料の類が詰め込まれている。

これから宮殿に向いて正式にノスセンテス行きの仕事を賜り、説明を受けた後はそのまま出発する。

昨日のプチ騒動から一夜明けて、屋敷の使用人達はスンに一切の礼を欠く事無くしっかり対応しており、悠介も『これなら安心して留守を任せられるな』と肯いた。

「スン、俺の留守中の一つ頼みたい事があるんだけど」

「はい？ なんですか？」

悠介はスンに『風技の指輪』を預けると、四日後くらいに風神隊の副隊長に渡すよう頼んだ。ヴォレットに頼んでも良かったのだが、姫君直々に渡されたとすると、特に他意は無くとも色々な憶測を呼んで面倒な事態になりかねない。

余計な騒動を避ける意味でも、悠介に近い人間で且つ宮殿内で顔の知られているスンが適役と判断したのだ。

「じゃあ、行つて来るよ」

「行つてらっしゃい、ユースケさん」

スンが悠介の腕をそつと握つてスツと離れる。すっかり出掛ける時のおまじないの様になつてしまつた感のある、いつものスンの仕草だ。悠介はこつちからも何かリアクションを取つたほうが良いかな？ と何となく思いつき、スンの髪をそつと撫でた。

一瞬驚いたように目をぱちくりさせていたスンは、少し頬を赤らめながら、ふんわりした笑みを浮かべて悠介を送り出した。

悠介が中央広間に下りて来ると、執事長と二人の使用人が扉の前で送り出す。

「留守中、スンを頼むよ」

「畏まりまして御座います」

玄関に横付けされている専用馬車に乗り込み、悠介は執事長に一声掛けてから屋敷を後にした。

◇◇◇

「では、任務の概要を伝える」

ヴォルアンス宮殿の上層階にて正式に親書を届ける任務を賜つた闇神隊。これから大使とその補佐二名を連れてノスセンテスの首都であるパトルティアノーストへと赴き、数日間の滞在を経て帰国する。

表向きの役割は、エスヴォブス王の親書を運ぶ事だが、実質的には大使一行の護衛を担っていた。「本来なら各宮殿衛士隊から選抜して護衛隊を組織し、じっくり外交を進めたい所だが……」

今はノスセンテスもガゼッタと睨みあっているという緊張した時期だけに、迅速な遂行を優先したのだと、クレイヴォル炎神隊長が事情を交えて任務の概要を説明する。

旅の行程はまず、サンクアディエツトを出発したら南にある小さな街を目指して、そこで一泊。翌日、一日掛けて月鏡湖の近くにある港街まで移動し、また一泊。その翌日は舟で湖を渡つてトレントリエッタ国領土の半島に上陸し、そこからは徒歩で半島の中程まで移動して野営する。

更にその翌日にはトレントリエッタ領の半島を抜けてトレントリエッタとノスセンテスの国境付近まで南下し、ノスセンテス側から派遣される予定になっている護衛隊と野営地で合流。そのまた翌日には彼等の馬車隊にてパトルティアノーストを目指す。

順調にいけば、四日後の昼過ぎにはノスセンテスの首都に入ることが出来る。

「なお、トレントリエッタの半島には魔獣が出る恐れがあるので、十分注意して欲しい」

「魔獣とか見た経験ないんだけど、対処法は？」

「基本的に危険な野生動物の類とみて問題ない」

魔獣は元々は普通の肉食動物だったのが、神技人を食べた事で神技の力の影響を受け、突然変異した存在であるらしい。その魔獣の犠牲となった神技人の属性が、体毛などの色に表れる。魔獣が神技を行使するような事は無いが、同じ属性の神技の民を好んで狙うようになるそうだ。

遭遇した場合、仲間の誰を狙ってくるのか体色によって判断を付け易いので、上手く誘導して立ち回れば怪我人も出さずに撃退出来るだろう。

また、魔獣の中には肉食型の捕食植物が魔獣の死骸から芽吹いて変異した植物系のモノもあり、それらは自ら獲物を求めて森の中を徘徊している。植物系の魔獣は属性の色を持たず、基本的に森から出る事も無い。火に弱いという弱点もあり、動物系肉食型に比べると危険度は低めだ。

更に、草食動物が何らかの要因で肉食型や植物系の魔獣を体内に取り込んで変異した草食型魔獣もいるが、こちらは滅多に人を襲わない為、見掛けても放っておけばあまり危険は無い。

「野営は森の外で行い、常に火を焚いておけば安全だろう」
「なるほど」

それにヴォーマル達にも魔獣の討伐経験はあるので安心だ。となると道中、特に注意を払うべき危険は野盗などの武装集団による襲撃の類となる。が、フォンクランク領を出た後は街道を通らず

最短距離を行くルートを使う為、遭遇する確率も少ないだろうとの事だった。

「それでは、貴殿の武運と任務の成功を期待する」

「無理するでないぞ？ 皆、無事に帰って来るようにな」

全員の無事を祈るヴォレットに見送られながら、闇神隊は一路ノスセンスの首都に向けて出発した。

闇神隊と大使達を乗せた馬車が最初の目的地である小さな街に到着したのは、その日の夕方頃だった。明日から本格的な長距離移動を行う為、今日の短い行程は足慣らしのようなモノである。

悠介達は大使役の三人と今後の行程や段取りについて二、三の細かい確認を終えると、明日に備えて宿部屋で身体を休める。

「イフヨカ」

「あ、隊長……」

「今日の報告か？」

「はい」

広々とした通りに出て、サンクアディエットの方角に集中しているイフヨカ。風技の伝達で今日の行程が無事遂行された事を宮殿に伝える、大事な仕事だ。移動中の索敵や定期連絡など、伝達系

風技は地味なようにいて非常に重要な役割を担っている。

「私、今回みたいに……遠い所まで行く任務って、初めてなんです」

「俺もだよ」

「あ……そ、そうでしたね……」

闇神隊のメンバーは、悠介が別の世界から神として召喚されて来たらしいという事を知っている。とはいえ、『そもそも邪神とはなんなのか?』という根本的な部分に関しては、当の本人を含めてよく分かっていない。

「隊長って……ちつとも邪^{よこしま}な感じ、しませんよね」

「ははは、邪神って言っても多分そういう呼び名が使われてるだけで、本当に邪悪だったりする訳じゃないんだと思うぞ?」

自分の事ながら、悠介は『災厄の邪神』を言葉通りの存在だとは考えていなかった。シンハとの会話などから拾い集めた邪神に関する情報の欠片を繋ぎ合わせ、悠介なりに『邪神とは、革命の鍵になるような存在ではないか』と分析している。

「まあ、シンハの所へでも行って調べた方が確実なんだろうけど」

「……隊長は、その……いつか、ガゼッタに行っちゃうんですか?」

「いずれは出向こうかと思ってるよ。つつても、向こうに付くって訳じゃないぞ?」

自分がこの世界に存在する意味を調べに行くだけだという悠介に、イフヨカはどこか不安げな表情になる。

「それでもし、隊長がガゼッタに……味方しなくちゃいけない存在だったら……?」

「そんなときやそんなときに考えるさ」

「真面目に答えてくださいっ」

さして考える素振りも見せずさりと答える悠介に、イフヨカは珍しく食い下がって問い質^たそうとする。将来、敵対関係になるかもしれない事を恐れるイフヨカの気持ちを察^なしてか、悠介は宥^{なだ}めるような口調でキツパリと明言した。

「俺が俺である限り、お前達の敵になる事は無いよ。だから安心しろ」

「……はい」

イフヨカは小さく頷いた。

翌朝、早い内から出発した闇神隊一行は森の中を突っ切る街道を順調に進み、ブルガーデン方面と港町方面への分岐点付近で昼の休憩に入った。ここから港街までは、サンクアディエツトとルフクの村を往復するくらいの距離がある。

「このまま行けば、到着は夜になりやすね」

「そっか、ご苦労さん。みんな出発までゆっくり休んでくれ」

「うーっす」

「隊長、食事の用意が出来ました」

街道脇に停めた馬車の傍で、大使役達も交えて皆で円陣を組みながら簡易食を頬張る。森に入っ
て少し探せば、自生するウラの実が見つかる。カルツイオでは、余程荒れ果てた土地でなければ、
旅の道中で食糧に困ることはまず無い。

「この辺りには魔獣とか出ないのか？」

「フォン克蘭ク領内の動物系魔獣は大体狩り尽くされてやすね、森の奥まで入るとまだたまに植
物系が残ってるようですが」

街道付近なら概ね安全が確認されている。これは五、六年ほど前ブルガーデンに国境を封鎖され
ていた頃に、遠回りで街道を行く事になる商人達の安全を図るべく、徹底して街道付近の魔獣を討
伐したという経緯があった為だ。その結果、魔獣がほとんど寄り付かなくなったのである。

代わりに、盗賊団が出没するようになってしまったのだが。

「集団で武装した人間の方が、魔獣なんぞよりよっぽど危険ですぜ」

「皮肉なこったな」

魔獣退治もやり過ぎると却って危険な状況を生み出してしまう。そういう意味で、フォン克蘭

クは『何事も行き過ぎは良くない』という教訓を得たのだそう。

旧来の身分制度を保ちながらも無技人の立場向上に理解を示すなど、時代の変化に柔軟な姿勢を
取れるのは、その辺りが関係しているのかも知れない。

休憩を終えた一行は、港街を目指して森に囲まれた街道をひた走る。太陽が沈もうかという頃に
森を抜け、右手に月鏡湖を眺めながら馬車を走らせること約三時間、湖に面した人口二千五百人程
の港街に到着した。

魚の荷揚げがされている栈橋^{さんばし}を見下ろす大きな宿の前で馬車を降りると、皆で手分けして荷物を
下ろし始める。明日は舟で湖を渡り、その後暫く徒歩で移動する事になる。荷物は全て担^かいで行か
なくてはならない。

「明日からはいよいよ国外か」

風技の伝達で今日の報告を行っているイフォカの傍らで、悠介は月が映る暗い湖面を眺めながら
呟いた。